

他教科との連携を踏まえた小学校英語教育

—内容スキーマの向上を意識した指導法の検討—

唐川和彦（北海道教育大学附属旭川小学校・中学校）

Abstract

The promotion of English education at the elementary school level has been argued so far. The pros and cons are still battled back and forth. However, Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology (MEXT) has decided to introduce English education starting at the fifth-grade level in 2011. MEXT has started to distribute the tutorial manuals and the teaching plans for all elementary schools. However, most of the topics might well be called a summarization of the previous materials that are the learning games and activities which we have already known. Research of recent years in psychology of learning shows us that the materials with reality serve as important driving forces in evolving capacities of children for their learning. This means that it is necessary for the children to use the materials, what is real such as using natural resources for day-to-day living, for teaching English. A large vocabulary is contained in the other types of materials which are used by children everyday. It is effective and durable for the teachers to use the textbooks of the other subjects in English education at the elementary school. The teaching methods based on child's cognitive development and the thoughts of how to increase the growth potential of children's content schema are shown in this paper.

1. はじめに

全国小学校では2009年度の移行措置を経て、2011年4月から5、6年生を対象に本格的に英語教育が必修化される。小学校英語教育の導入に関してはこれまで様々な論議がなされており、さらなる検討が必要だと言われている中、文部科学省はその導入を決定した。さらに2008年5月26日、教育再生懇談会の第一次報告では、「小学校について、国は、少なくとも3年生からの早期必修化を目指し、3年生から35時間以上の英語教育を行うモデル校を大規模に（約5000校）設け支援する」といった内容の審議がまとめられた。

小学校英語導入決定の事実が存在するからには小学校の教育現場において学習効果のある指導案作成と英語教育担当教師の育成が必要不可欠となる。これまで提示されている、小学校英語教育に関する書籍やマニュアルの内容の多くは、歌やゲームなどが中心となっている。文部科学省が提案している小学校英語活動では、歌やゲームを通じ異国の文化や言葉を児童達に知ってもらうことが基本目的である。しかしアクティビティを中心とした小学校英語活動を先行実施している担当教師の中には、そういったゲーム中心の活動に疑問を抱いている者も少なくはない。ゲーム中心の英語活動で、児童達は果たして何を習得したのだろうかという疑念が生じているのである。

小学校英語活動では「評価」を出す必要性がないことから、指導する教師や学ぶ児童達にとって達成感を感じ取ることが難しいのである。指導者や学習者が学習の達成感を得るようにするためには、「楽しい英語活動」ばかりで授業を完了させるのではなく、他教科との連携を意識した英語活動を実施することが必要なのではないだろうか。他教科との連携は児童のスキーマ、特に内容スキーマの構築を促すはずである。

文部科学省は定期的にALTを派遣することを前提に小学校英語教育を計画しているが、実質英語指導の中心となるのは担任教師である。小学校の担任教師は全教科を一人で受け持っているケースが殆どであるから、授業進度に合わせ英語教育と他教科の連携を明確化しやすいはずである。その利点を生かした英語教育活動を小学校において取り組めば大きな効果が期待できる。

本研究では、先行研究のひとつとして、イギリスのナショナルカリキュラ

ムに代表されるクロスカリキュラム(Thomas & Collier, 1997)の考え方や、「子供の興味関心を重視した単元構成:他教科と関連づけて」(第3回北海道教育大学小学校英語プロジェクト・実践交流会:平成20年2月、実践発表4)の発表内容を念頭に据えながら、小学校1年生から6年生までの英語指導の取り組みを通じて見えてきた問題点と打開策、さらに他教科との連携を意識した授業展開方法に関して考えるとともに、生徒達の内容スキーマ向上を視点において考察する。

2. 内容スキーマの向上を意識した指導

人は何かを学習する際には必ずすでに自分自身が持っている知識を利用する。その知識は新しい学習を誘導し可能にする。認知心理学の分野において、ある領域に関して人が持っているひとまとまりの知識を「スキーマ」という。認知言語学の分野においても頻繁に使われている言葉でもある。

スキーマは様々な断片的な知識要素が「因果関係・包含関係・順序関係」(今井、2004)などの関連を経てそれぞれが結びついたものである。このようなスキーマを構築すればそのスキーマを適用することによって外界情報を効率良く処理することが可能なのである。スキーマは、テキストの構成や言語的なことに関する「形式スキーマ」と社会的あるいは文化的題材に関する「内容スキーマ」に大きく分類することができる。小学校英語指導導入を通じ、これからの児童達は前例のない新たなる両スキーマの構築を開始することになる。中高生と比較すると小学生の既有知識、特に内容スキーマは乏しい状態である。その様な状況の中での外国語という新たなる言語導入は、今後の学習に対してマイナスの作用を及ぼすことはないのだろうか。

内容スキーマも様々な断片的な知識要素が「因果関係・包含関係・順序関係」という経緯を経てそれぞれの要素が結びつく。小学校英語指導は児童達の正しい知識獲得の道筋を理解した上で実施するべきなのである。異国の文化背景や生活様式の違いをしっかりと習得させ、その次の段階として始めてゲーム活動やアクティビティ活動を実施しなければならないのである。知識の豊富化だけでは学習者の脳はパニックを起こしかねない。まずは、知識の再構造化を図ることが先決なのである。

知識の再構造化とは、自分が持っていた今までの知識を根本的に見直し、構造を作り変えることを示し「概念変化」とも言われる。しかし児童達が自身の力でこの知識の再構造化を図ることはまず無理であろう。指導者である教師が児童達の内容スキーマの向上を意識した英語指導の取り組みの計画を立てる必要がある。「因果関係・包含関係・順序関係」を持たせた小学校英語活動を実施するべきなのである。

3. 英語ノートや小学校外国語活動研修ガイドブックの分析

3.1 英語ノート

文部科学省は小学校英語活動で利用できる「英語ノート」(文部科学省、2008a)を、2009年4月から小学5、6年生とその担任教師に配布する方針を固めた。「英語ノート」はCD付きのワークブック形式になる予定で、2009年に小学校に配布する計画である。2008年9月現在、小学校の一部に対して英語ノート指導資料第5学年用(試作版)が配布されている。それには Lesson1 から Lesson9 までのそれぞれの解説と授業案例が示されている。各単元を3～4時間で完了する構成になっており、通年で35時間の授業予定である。

表1 英語ノート【試作版】5年生指導計画

		タイトル	指導時間
第5学年	1	世界の「こんにちは」を知ろう	3時間
	2	ジェスチャーをしよう	4時間
	3	数で遊ぼう	4時間
	4	自己紹介をしよう	4時間
	5	いろいろな国の衣装を知ろう	4時間
	6	外来語を知ろう	4時間
	7	クイズ大会をしよう	4時間
	8	時間割を作ろう	4時間
	9	ランチ・メニューを作ろう	4時間
			合計35時間

表2 英語ノート【試作版】6年生指導計画

		タイトル	指導時間
第6学年	1	アルファベットで遊ぼう	3時間
	2	いろいろな文字があることを知ろう	4時間
	3	カレンダーを作ろう	4時間
	4	できることを紹介しよう	4時間
	5	道案内をしよう	4時間
	6	行ってみたい国を紹介しよう	4時間
	7	自分の一日を紹介しよう	4時間
	8	オリジナルの劇をつくろう	4時間
	9	将来の夢を紹介しよう	4時間
合計			35時間

他教科との連携という視点で英語ノートの内容構成を分析する。表1の8「時間割を作ろう」は学習者にとって毎日の学校生活に関わる身近なコンテンツである。毎日学校で給食を食べている児童達にとっては、9「ランチ・メニューを作ろう」は学習意欲の向上が期待でき、その後の給食や家庭での食事の場において学習した事柄をアウトプットできる内容である。

表2の3「カレンダーを作ろう」は他教科との連携とは直接関わりのあるものではないが、普段の学校生活において毎日必ず児童が黒板上で目にする「日付」や「曜日」に関わる事柄なので、学習しておくべき項目であると考え。その他の題材については、これまで実施されてきている小学校英語指導案を集約させた内容のものであり、楽しさを中心にしたゲームやアクティビティで授業が構成されている。

第5学年に注目すると、3「数で遊ぼう」では「算数」、5「いろいろな国の衣装を知ろう」では「社会」という教科を意識した指導をすれば、それぞれの教科指導の際に、逆に既習の英語を利用することが可能となり英語の学習効果や定着度がさらに向上する。第6学年では5「道案内をしよう」、6「行ってみたい国を紹介しよう」で「社会」を意識した指導が可能である。表3では小学社会6年上下（教育出版）の内容構成をまとめてみた。

表3 小学社会6年上下 (教育出版)

	学習内容	英語が利用できる
上	1 大昔の暮らしをのぞこう	○
	2 武士の世界をさぐる	○
	3 新しい日本の国づくりを見つめよう	◎
	4 戦争から平和への歩みを見直そう	◎
下	5 暮らしと政治を調べてみよう	◎
	6 世界の人々とのつながりを広げよう	◎

◎=有効 ○=簡単な工夫次第で有効

日本地図や世界地図あるいは建物や当時の食事の写真まで、小学社会の教材には、これまで小学校英語教育で習得させた英語を利用し得る単元が数多く存在する。これは社会という教科に限ったことではなく、他教科の教材についても同様のことが言える。

英語ノートの内容構成だけではなく指導パターンもあらかじめ理解しておく必要もある。例外も存在するが表4に示した指導方法が各レッスンにおいて適用されている。

表4 英語ノート【試作版】指導パターン

Let's Listen	CDを聞きながらタスクに取り組む
Let's Play	指導者の指示による学習者の英語活動
Let's Chant	チャンツによる単語・フレーズの定着
Activity	楽しみながら英語の発話活動
Let's Sing	歌を通じて英語に親しむ

英語ノートで準備されている授業案と他教科指導を踏まえ各指導者が準備する単語等を、表4内の指導法を利用して指導することは決して難しいことではない。

3.2 小学校外国語活動研修ガイドブック

小学校外国語活動研修ガイドブック(文部科学省、2008b)は、小学校における外国語活動に関する研修が円滑に実施できるよう、国から、指導者養成研修、中核教員研修、現職教員研修の参考用として配布されたものである。

内容は表5で示している「理論編」「実践編Ⅰ」「実践編Ⅱ」「実習編」「付録」で構成されている。

表5 小学校外国語活動研修ガイドブック各項目内容

「理論編」	小学校における外国語活動の基本的考え方や理念、研修の在り方、年間指導計画の立案、評価、小中連携を具体的に説明及び解説している。
「実践編Ⅰ」	授業を実際に行うときに必要な情報や授業の進め方、チームティーチングの進め方、様々な活動を行う際の注意事項等を説明及び解説している。また、校内で行われる研究授業などの具体的な進め方もまとめている。
「実践編Ⅱ」	英語を発音する際の注意点をまとめた「発音クリニック」を収録している。特に日本語にない音を中心にまとめている。付属CDで英語発音の特徴理解や矯正に役立たせるためのものである。
「実習編」	普段授業で使用するような「クラスルーム・イングリッシュ」とALT等との打ち合わせに必要な「基本英会話」、スキル別能力向上策、及び模擬授業を行う際の注意事項等がまとめられている。
「付録」	学習指導要領や「英語ノート」で取り扱われる語彙や表現がまとめられている。

この小学校外国語活動研修ガイドブックは、現場で指導する教師が期待している「すぐに使える英語指導マニュアル」ではなく、指導する担任・担当教師の英語力向上マニュアルである。学校がきちんと研修計画を立て、全教

師にしっかりとした研修の機会を与えることができれば、役割を果たすものであろう。しかし、含まれている内容が多岐にわたるため数回の研修では伝えきれぬ内容ではない。

各教育委員会によって方針に差異はあるが、北海道教育委員会は平成20年8月20日に以下の方針を決定した。

『小学校の外国語活動（英語活動）必修化に伴い、一校につき教員一人を対象に英語活動研修を行う。研修後、参加した教員が講師となって自校で校内研修を行い、全教諭が英語活動を担当できるようにする。平成20年9月以降、各教育局が順次研修会を開催する。研修の対象は、道内の全千九十一小学校（札幌市を除く）の「英語活動推進教員」で、推進教員は各校が異動期などを考慮して決める。このほか、札幌市内の小学校教員についても同市教委が別に行う。

研修会は各教育局が本年度と来年度に各一回、管内の推進教員を集めて開催。「起立」などの英語での指示の言い回しや発音の指導法などを演習を交えて三日間で学ぶ。外国語指導助手（ALT）や英語の堪能な地域の人材を活用するため、複数指導の進め方も取り上げる。

推進教員が行う校内研修は、全教諭を対象に三十時間程度、教育局の研修内容を踏まえて企画、実施する。』（北海道新聞、平成20年8月21日）

以上が北海道教育委員会の実施計画である。三日間の推進教員に対し開催する研修計画の詳細については現在のところ不明であるが、物理的にこの三日間で小学校外国語活動研修ガイドブックの内容全てを網羅することは不可能であろう。小学校英語指導を既に経験している複数の現場教師からの十分なヒアリングを通じ、充実した三日間の研修内容の構築が早急に望まれるところである。突然に泣き出す児童、カルタゲームなどのゲーム活動で怪我をする児童、アクティビティにおいて仲の良くない児童同士が同じグループになってしまい活動が停止するなど、小学校の指導では予測不能な事態が生じることがある。現場の教育事情が十分に配慮された内容の研修会であることが求められる。現在のところ、研修内容についても公表されていないので、

今後の各教育局の取り組みに注目したい。

4. 現在の小学校英語教育における代表的なアクティビティ

これまでの小学校英語教育において実施されている代表的なゲーム活動やアクティビティについて、他教科への英語利用可能度を含め、表6にまとめてみた。主に、ゲームやアクティビティの役割が学習内容の定着を目的としていることは周知のとおりであろう。学習者がこれまでの活動を通じ学習した、他教科に関わる文脈や語彙の定着に向け、これらのゲーム・アクティビティが有効活用可能かどうかを示した。それぞれの活動内容の詳細を把握した上で、この活動で他教科に関わる文脈や語彙を利用することができるかどうかについて考察したものである。◎は有効、○は簡単な工夫次第で有効、×はかなりの工夫が必要であるということを意味している。

表6 代表的な小学校英語教育におけるゲーム・アクティビティ

	タイトル	対象学年	有効活用の可能性
1	ジェスチャーゲーム	全学年	○
2	挨拶自己紹介	全学年	○
3	4コマ漫画	全学年	◎
4	世界のじゃんけんゲーム	全学年	○
5	数字ピラミッドゲーム	全学年	◎
6	キーナンバーゲーム	全学年	◎
7	キーワードゲーム	全学年	◎
8	カード取りゲーム	全学年	◎
9	チャンツゲーム	全学年	◎
10	カルタゲーム	全学年	◎
11	サークルカードゲーム	全学年	○
12	仲間探しゲーム	全学年	○
13	時間制限ゲーム	全学年	◎
14	カード交換ゲーム	全学年	◎
15	カウントゲーム	全学年	○

16	フェイスビルディングゲーム	全学年	○
17	負けてもオッケー	全学年	○
18	ラッキーパーソンゲーム	全学年	◎
19	じゃんけんカード交換ゲーム	全学年	×
20	手つなぎカウントゲーム	全学年	○
21	ロンドンブリッジ	低学年	×
22	フルーツバスケット	低中学年	◎
23	3秒バトル	中高学年	◎
24	質問ゲーム	高学年	○
25	世界の挨拶&ジェスチャー	高学年	◎
26	名詞作り	高学年	×
27	友達紹介ゲーム	高学年	×
28	Which ゲーム	高学年	○

◎=有効 ○=簡単な工夫次第で有効 ×=かなりの工夫が必要

指導者による具体的な指導目標の設定次第で、これまで単なるゲームやアクティビティで完了していた小学校英語活動が他教科を意識した英語活動に変化する。総務省からSCOPE研究の採択を受けて行われているプロジェクトCELENET(Children's English Language Education Network)等で、指導者同士の情報交換の場を利用することも大変有効な方法である。様々な情報を共有しながら指導者自身がこれまでの枠組みにとらわれず、新たなアイデアを作り出すことが大切なのである。

5. 他教科との具体的連携として

他教科の授業と英語教育を絡めた指導を推進する際には、文部科学省の提示する学習指導要領の本意に沿った内容でなければならないことは言うまでもない。指導者は学習指導要領の内容をしっかりと把握した上で、指導に当たらなければならない。学習指導要領に記されている各科目のそれぞれの目標を提示し、それに対しどのような英語教育活動を実施することができるのか具体的に述べる。

5.1 国語（小・中・高学年）

「国語を適切に表現し正確に理解する能力を育成し、伝え合う力を高めるとともに、思考力や想像力及び言語感覚を養い、国語に対する関心を深め国語を尊重する態度を育てる。」

【具体的指導として】

小学校英語のアクティビティに使用されるピクチャーカードの代表的なものに果物・野菜・乗り物・食べ物・動物・曜日がある。通常、指導者がピクチャーカードを生徒に見せ、生徒がその絵を見て英語を言うという指導が一般的である。この指導の流れに漢字演習的要素を含めることは決して難しいことではない。ピクチャーカードの提示に変わって、指導者が英語を言わせたい名詞の漢字を板書し、生徒が英語で発話する。その逆の作業として、教師が英単語を言い、生徒はそれを漢字で書き取る。ピクチャーカードを提示して生徒は漢字で書き取り、さらに英語で発話する。小学校英語導入よりも小学生の母国語力の向上優先という考えは、小学校英語指導の反対理由の多数を占めている。英語指導と母国語指導をリンクさせることでその問題の一部は解消されることになる。

国語の授業では生徒の成長段階に合わせ教えてもよい漢字とそうではない漢字があるが、英語指導で利用する漢字については、それに捉われる必要はない。学習者にとっては提示されている漢字はあくまでも「キー」となるもので、これまで使用しているピクチャーカードと相違ない役割を果たすものである。「薔薇」という漢字を見て、バラをイメージし、英語を発話出来ればいいのである。

5.2 社会（中・高学年）

「社会生活についての理解を図り、我が国の国土と歴史に対する理解と愛情を育て、国際社会に生きる民主的、平和的な国家・社会の形成者として必要な公民的資質の基礎を養う。」

【具体的指導として】

日本地図を利用し、各都道府県位置関係を提示しながら、各地の名産品や収穫される野菜や果物を生徒に言わせる活動が可能である。さらに、これま

で定番とされている「道のたずね方」では、通常は架空のマップを使用し「Turn right. Turn left. Go straight.」等の表現を使い目的地まで到着させるアクティビティを行う。その活動を各指導校周辺地図に置き換えてリアリティーのあるものにする。生徒がパイロット役を演じ、国内地図や世界地図上を管制塔役の生徒の指示にしたがい、飛行機に見立てた各児童の消しゴムを移動させるという活動も効果的である。地理や歴史の指導が基本となる小学校における社会の授業には多くの英語素材が埋もれており、むしろ素材が多すぎて取捨選択に困るぐらいである。

5.3 算数 (小・中・高学年)

「数量や図形についての算数的活動を通して、基礎的な知識と技能を身に付け、日常の事象について見通しをもち筋道を立てて考える能力を育てるとともに、活動の楽しさや数理的な処理のよさに気づき、進んで生活に生かそうとする態度を育てる。」

【具体的指導として】

四則計算をアクティビティに盛り込むことは比較的容易である。数字を英語で言うトレーニングさえ初期の段階で積んでおけば、通常の算数の計算作業を通常の算数の指導過程通り行わせ解答だけを英語で行うことができる。さらに、各計算問題の解答の際に教師が二つの解答（正・誤）を準備しておき、教師の二つの英語による解答を生徒が聞き分け正解を選択させるという二者一択活動も可能である。この過程だけでも英語のリスニング力は向上する。

低学年においては、足し算や引き算を基本としたアクティビティを実施する。野菜・フルーツ・動物などのピクチャーカードを使ったアクティビティを行う際、黒板に貼り付けたピクチャーカードの下にそれぞれ1～9以下の数字をそれぞれに割り当て板書しておく。生徒全員に「What animal(fruit, vegetable, etc.) do you like?」と言わせ、教師は「I like cat(2) and dog(3).」と答える。この場合、「cat」は2を意味し、「dog」は3を意味する旨を板書済みなので、生徒は「2+3」と判断する。生徒達は教室内を自由に動き回り、5名(2+3=5)のグループを作り、手をつないだまま腰を下ろす。生徒達

は積極的に計算活動をしながらかグループ作りに熱中する。

5.4 理科 (中・高学年)

「自然に親しみ、見通しをもって観察、実験などを行い、問題解決の能力と自然を愛する心情を育てるとともに自然の事物・現象についての理解を図り、科学的な見方や考え方を養う。」

【具体的指導として】

理科という科目はさまざまな名詞を覚えることが大前提の教科である。自然や事物の学習で登場する様々な名詞を英語でも伝えればよいのである。昆虫・魚・動物・星・惑星など英語指導の素材には限りがない。単元に関わりのある単語に関するピクチャーカードを準備し、英単語の確認をするだけでも効果がある。

5.5 生活 (低学年)

「具体的な活動や体験を通して、自分と身近な人々、社会及び自然とのかかわりに関心を持ち、自分自身や自分の生活について考えさせるとともに、その過程において生活上必要な習慣や技能を身に付けさせ、自立への基礎を養う。」

【具体的指導として】

小学校教員以外の人達にはあまり馴染みがない教科かも知れない。教科書には、沢山の種類の草花の名前や小動物の名前が並んでいる。同時に写真も随分と掲載されているので、ピクチャーカードの作成などにとっても便利である。普段の生活の中に存在する和製英語と本当の英語との違いを認知させるには便利な教材と言える。

5.6 音楽 (小・中・高学年)

「表現及び鑑賞の活動を通して、音楽を愛好する心情と音楽に対する感性を育てるとともに、音楽活動の基礎的な能力を培い、豊かな情操を養う。」

【具体的指導として】

小学校英語指導において、英語の歌を聞いたり歌ったりする活動は生徒の

学習の動機付けにもなる必要不可欠なものである。小学校英語活動に関する殆どの指導書に「英語の歌」が掲載されていると言っても過言ではない。

指導者である教師によってその指導方法は異なるが、一般的にはCDを利用し生徒に歌を覚えさせ徐々に一曲を完成させるという方法が定番である。楽器を使って指導できる教員は、演奏しながら生徒の習得の状況に合わせて指導ができる。英語の歌の指導を通じ英語の自然なリズムやアクセントを習得させることができる。

現在様々な音源も発売されており、日本の歌が英語で収録されているものも多い。元気よく歌わせる指導から輪唱やハーモニーなど一段進んだ指導をするのも効果的である。非常に容易な例として、「大きな栗の木の下で」(Under the Spreading Chestnut Tree) をあげることができる。クラスを二つに分け輪唱をさせる。輪唱のグループを徐々に増やすと綺麗なハーモニーとなる。

5.7 図画工作 (小・中・高学年)

「表現及び鑑賞の活動を通して、つくりだす喜びを味わうようにするとともに造形的な創造活動の基礎的な能力を育て、豊かな情操を養う。」

【具体的指導として】

図画工作では、文房具や道具など様々なツールを使用する。これらのツール名を英語で紹介しておけば、実際の図画工作の授業の中で生徒に英単語で指示することができる。普段の授業において、教師は使用する材料や道具を手にとり生徒に見せながら指導しているのである。その際、その材料や道具を英語で言い直後に日本語でフォローアップするだけでいい。作業過程を英語で言う必要はない。場合によっては怪我を伴うことがあるこの授業では、作業過程についてはこれまでの指導と同様に日本語で生徒に理解しやすく説明する必要がある。

5.8 家庭 (高学年)

「衣食住などに関する実践的・体験的な活動を通して、家庭生活への関心を高めるとともに日常生活に必要な基礎的な知識と技能を身に付け、家族の一

員として生活を工夫しようとする実践的な態度を育てる。」

【具体的指導として】

衣食住に関する実践的な体験をさせることが目的であるこの教科には、日頃から馴染み深い材料や道具が沢山登場する。形容詞の指導には最適な科目と言える。「衣」では「針・糸・ミシン・布」などが使用されるので、これに加え「色」を英語で指示することができる。「赤い布」「黒い糸」のような「色＋名詞」表現や「大きい・小さい・長い・短い」等の形容詞も使用できる。

「食」においては、料理が中心となる内容なので食物の材料名や調理道具などを英語で言うことができる。「切る」「加える」「洗う」「焼く」「煮る」などの動詞も多く登場するので、英語指導の時間にこれらの動詞を指導しておけば効果的である。

5.9 体育 (小・中・高学年)

「心と体を一体としてとらえ、適切な運動の経験と健康・安全についての理解を通して、運動に親しむ資質や能力を育てるとともに、健康の保持増進と体力の向上を図り、楽しく明るい生活を営む態度を育てる。」

【具体的指導として】

通常の英語指導でも多く見受けられる「体の部位名」(body parts)がこの教科では効果を発揮する。「手を回す」「屈伸する」「アキレス腱を伸ばす」「頭を横に曲げる」など、体の部位を指示することが必要な科目である。この教科もきちんとした指導や指示を提示しないと怪我を誘発する可能性があるため、活動指示などに関しては英語を使用する必要はない。集合指示や準備運動・道具の片づけなどの際に英語を使用するだけでも効果がある。

6. まとめ

英語の immerse (浸す) が語源となるイマージョン教育と本論の他教科連携には根本的な考え方に違いがある。ここで述べてきた他教科を意識した小学校英語教育は、完全イマージョン(full-immersion)、部分イマージョン(partial-immersion)、双方向イマージョン(two-way-immersion)、あるいは二言語同時学習(dual language education)のいずれとも異なる。英語の授業

で学んだ単語や表現を他教科の指導の中で、「英語を使用しても本来の教科学習の妨げにならない場面のみ」において英語を使用するという考え方である。英語の授業においては、他教科の指導内容を踏まえ単語や表現を事前に抽出しておきゲームやアクティビティに加えるという捉え方なのである。

小学校英語導入について未だ賛否両論がある中での導入決定だけに、指導現場の教師達の戸惑いは隠しきれないことは事実である。その様な現状で「イマージョン教育」という言葉を使うことは更なる不安を煽ることになる。その点で言えば、「他教科との連携を踏まえた小学校英語教育」というスタンスであれば指導担当の教師達へのプレッシャーも和らぐであろう。英語の授業で学んだことが他教科でも反映され、他教科で学んだ事柄が英語の授業でも利用できるなら、指導者にも学習者にも小学校英語教育の目的が明瞭になる。文部科学省が推進している小学校英語の到達目標や方向性を保持しながら、更なる学習効果が期待できるのである。

米国テネシー州バンダービル大学での状況依存型学習観(Situated Learning)に基づく授業を支援するための教材(Anchored Instruction)の開発研究であるジャスパープロジェクト(The Cognition and Technology Group at Vanderbilt, 1992)は、今後の小学校英語教育考察の参考となるものである。これは小学校5、6年生を対象に算数の問題発見と解決の技能育成を目標とし、学習意欲をそそるリアルな文脈を提示するビデオディスク教材を中心に構成されている。ジャスパーは主要登場人物の名前である。実生活において身近に存在する算数に関する事象を題材としジャスパーが問題を児童達に投げかけるというものである。1990-91年度、米国東南部の9州16校で公立小学校5、6年生739人を対象(統制群を含む)に実施したフィールドテストでは子供達はもとより教師やPTAの反応は絶大であった。(鈴木、1992)

学習心理学における近年の研究ではリアリティー感覚を学習者に与える指導が最も重要とされ支持されている。現在、小学校英語教育において一般的に実施されている「自己紹介」や「道案内」などは、近年外国人が多く暮らすようになった日本においてでさえもリアリティーのある状況設定とは言い難い。海外旅行へ頻繁に行くような児童にとってはその学習が直接役に立つ

が、多くの児童にとってその状況設定はリアリティーに欠くものにちがいない。毎日の学校生活で経験する事柄や学習において必要な事象について英語と連結させること、つまり他教科間の連結こそが生徒の学習意欲を高めるのである。全ての教科での通常指導の中に負担にならない程度の英語を加えることで、更なる論理的思考力や内容スキーマを育成することが可能となる。アフォーダンス(Gibson、1977)とは、環境が知覚に与える(afford)情報のことであるが、児童達が臨場感溢れるリアルな場面で学習をするためには、ジャスパープログラムの様なアフォーダンス色の濃い指導案や教材が必要であろう。英語の授業で学んだ知識を他教科の授業、学校生活あるいは日常生活で当たり前に見えるようになるといった明確な目的意識を持ったカリキュラム構成が必要なのである。他教科との「因果関係・包含関係・順序関係」を持たせた小学校英語活動こそが小学校の教育現場には必要なのである。

謝辞

3名の査読者の方々からは、問題点を様々な角度から指摘して頂くなど御教示を賜りました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。

注

本研究は、平成20年10月4日に行われた北海道英語教育学会第9回研究大会において、一部口頭発表したものに修正・加筆を加えたものである。

引用文献

Gibson, J.J. (1977). The theory of affordances. In R. Shaw & J. Bransford (Eds.), *Perceiving, acting, and knowing: Toward an ecological psychology*. Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum.

The Cognition and Technology Group at Vanderbilt. (1992). The Jasper Series as an example of anchored instruction: *Theory, program description, and assessment data*. *Educational Psychologist*, 27 (3), 291-315.

Thomas, W. P., & Collier, V. (1997). *School effectiveness for language*

minority students. Washington, DC: National Clearinghouse for Bilingual Education.

今井むつみ. (2004). 『人が学ぶということ』. 北樹出版.

鈴木克明. (1992). 「情報社会型の放送教育 I」『放送教育』.1992年12月号.
31-32.

文部科学省. (2008a). 『英語ノート第5学年試作版』. 文部科学省.

文部科学省. (2008b). 『小学校英語活動研修ガイドブック』. 旺文社.